

子育てサークルという「支援」の場

——親子多言語・アート教室の試みを事例として——

松山有美
遠山仁美

1. はじめに

「Bonjour!」、名古屋市に所在する文化劇場の一室からフランス人講師のかけ声に続いて子どもたちの元気な声が聞こえてくる。その声の正体は、月に2回開催される親子多言語・アートサークルである。このサークルを一例とする親子の集まりは、「子育てサークル」として注目を集めてきた。これまで子育てサークルとは、子どもを育てる保護者が子どもを連れ添って集まり、学習や情報交換をする場といわれてきた。しかし近年において、それは学習や情報交換の場としてだけでなく、保護者同士が集まることで保護者の孤立を回避し、育児不安の解消や虐待を未然に防ぐための相互支援を行う場として子育て家庭にとって必要な存在になっている。実際に、1980年代から全国において保護者の間で自然発生的に誕生したと言われる子育てサークルが、現在では国の少子化対策の一環として公的機関によって積極的に支援されるべき対象として位置づけられていることから、その役割の大きさは明らかであろう（寺田2005, 内閣府2009）。それ故、保育、特に子育て支援を語る上でこの子育てサークルの存在を看過することはできない。また、保育者養成校における学習テーマの1つとして、子育てサークルの実態とその役割に関して保育者を目指す学生たちに伝えていくことは不可欠である。

そこで、本稿の目的を次のように設定する。すなわち、筆者らが名古屋市内で開催されている親子多言語・アートサークルS（以下Sサークル）での活動を通して考えてきた、子育てサークルという「子育て支援」の在り方を今後議論していくための試論として、まずはサークルの活動を整理し報告したい。その際、サークルの概要および活動の報告に加えこれまでに実施してきたサークル内外での調査の一部を分析対象とした。

Sサークルは設立2年半とまだ日が浅い。しかしながら、この萌芽期にあるサークルに注目することに意義がある。すなわち、子育てサークルの新規立ち上げから安定的なサークル活動への移行、そして長期的な開催を継続調査することを通して、子育てサークルの課題と展望に迫っていくことが可能となるのである。汐見ら（2001）の研究においても明らかのように、子どもの成長とともに活動維持の壁にぶつかると言われる子育てサークルだが、萌芽期から丁寧に活動の変遷

を追うことで、実際にその活動に内包される具体的な課題とは何であるかを浮き彫りにすることができるのである(汐見2001, 原田2002, 品川2005)。その第一歩として本稿を位置づけたい。

2. サークルの概要

本稿の研究対象は、親子多言語・アートサークルSである。ここではSサークルの活動場所や活動内容を整理する。Sサークルは、名古屋市西部を活動拠点とする子育てサークルである。活動は月におよそ2回、名古屋市が所有する文化劇場の一室で行われている。活動の対象は、0歳児から未就学児の6歳児までの子どもとその保護者である。サークルに参加する子どもの年齢は、1・2歳児がもっとも多く、3歳、4歳児がそれにつづく。参加する保護者は、平日開催時は母親が中心であるものの、土日・祝日の開催時は、父親の参加も少なくない。また、母親らのおよそ60%は専業主婦であり、およそ20%が育児休暇中、およそ20%がフルタイム就労者である。参加者の居住地については、名古屋市内はもちろんのこと東海市、大府市、日進市また岐阜市など名古屋市外も多数存在し、Sサークルに片道1時間かけて参加する親子もいる。これまでにSサークル活動に参加した親子は100組を超える。

また、Sサークルへの参加は入会金や教材費といった固定費用を必要としないオープンクラスの形態をとっている。それ故、入会や退会という参加親子の登録制度はない。事前にメールで予約さえすれば都合の良い日にいつでも参加でき、むろん子どもや保護者自身が活動に合わないと感じれば、以降参加しないという選択も容易にできる。さらに、乳幼児は体調の変動も大きいため、当日、発熱等で欠席する場合も、キャンセル連絡の必要はなく、またキャンセル料金や振替えレッスンなどの面倒な手続きもない。参加費は、サークル運営の必要最小限あたる施設利用料、講師への謝金、および、その日の教材費のみで、親子1組につき1回500円～1000円前後をその日受付で払う。多くの幼児教室やお稽古スクールは、欠席や途中退会した場合の返金システムがないため、保護者にとっては有る程度のリスクを背負う必要性があるが、Sサークルでは、あくまでも保護者が集う相互支援の場として非常に緩やかな形態をとっている。

3. Sサークルの活動内容

サークルの活動内容は、フランス語クラス、英語クラス、アートクラス(音楽・リトミッククラス)を三本柱とする。その他、ノエル(フランスのクリスマス)やイースター、セントパトリックデー(アイルランドの祭り)といったグローバルイベントや、保護者を対象とした育児や幼児教育、語学や芸術に関する勉強会など、その活動は幅広い。活動の時間はおよそ2時間であり、その具体的な内容は次の通りである(表1参照)。

●フランス語・英語クラス

毎回1つのテーマが設定され、ネイティブ、もしくは、高等教育機関での教育経験、または資格を持つ日本人講師がレッスンを展開する。毎回のレッスンでは、“フランスのヴァカンス” “キ

子育てサークルという「支援」の場

キャンプにでかけよう！” “ママのお手伝い” など身近な話題から異文化を体験することができるようにテーマを設定している。また、クラス開始前にボランティアスタッフの保護者と講師が協力し様々な写真や絵などを使い教室内の環境づくりを行う。クラスの内容は、各テーマに沿ったキーワードやフレーズを、ごっこ遊びやゲーム、ダンスや歌にのせて親子で学んでいくものである。また、文化の話や講師の海外での実体験に基づくエピソード等を交えながらクラスは進行する。Sサークルのもう1つの大きな特徴は、必ず最後に保護者向けのレッスンをを行う点である。

“フランスのママンは、子どもがこんなことをしたらこのように声かけを行う” といった子育てフレーズはもとより、フランスの子育てスタイルと日本の子育てスタイルの相違点を紹介したり、アメリカの園児達の様子について、講師の現地での経験に基づく話を聞いたり、多様な育児を知ることを通して客観的に捉えグローバルな視野から子育てを眺めてみるといった機会を提供している。

●アートクラス（音楽・リトミッククラス）

アートクラスは、音楽・リトミックを中心としたクラスである。専門分野の学位、また、芸術教育経験を有する日本人講師が担当する。会場となる練習室は、舞台リハーサルやバレエレッスンにも使われる広いフロアで、天井が非常に高く、明るい照明に加え、天窓からは陽の光が子ども達に注ぐ。居住空間では確保が難しい広いスペースをふんだんに利用したダイナミックな遊びを取り入れたり、絵の具を広げて体全体を使って巨大画やぬらし絵を描いたりすることもある。また、個人の所有が難しいピアノ、トランペットやウッドブロックといった楽器に自由に触れ、思う存分音を出したりと、日常的な空間や物を越える開放的な時間の提供を心掛けている。

表1：Sサークルの活動の流れ

		フランス語・英語クラス	アートクラス (音楽・リトミッククラス)
I	リラックスタイム (受付からレッスン開始まで) (20分)	カラーボールやお絵かきなどを通して講師や他の参加者とコミュニケーションを図り、レッスンに向け、リラックスした状態を作る	ピアノや楽器に自由に触れ、また楽器を介して、講師や友達とのやり取りを楽しみ、レッスンへの興味を引き立てる
II	レッスン (40分)	フランス語もしくは英語のレッスン (手遊び、ごっこ遊び、ダンス、歌、絵本など)	リトミックを中心とした音楽のレッスン、および、ぬらし絵などの制作、造形遊び (手遊び、歌、表現、リズム打ち、楽典、音楽と絵本の世界、造形遊び、鑑賞)
III	保護者クラス (15分)	保護者を対象としたフランス語・英語のレッスン 子育てフレーズや外国文化のお話	
IV	交流広場 (20分～60分)	育児情報交換、 子ども同士の交流等など	育児情報交換、 子ども同士の交流など



図1：ネイティブインストラクターによるフランス語クラスの風景

また、Sサークルでは0歳児から6歳児が参加することによって異年齢活動を展開している。異年齢保育に関する是非はここで議論する余地はないが、少なくともサークル活動における利点としては次のような点が保護者の声として挙げられている。低年齢の子どもを子育て中の保護者、特に第一子を育てる保護者たちにとって高年齢の子どもたちの姿を目の前でみること、自分の子どもの発達の指標を得ることができる。先輩保護者から直接アドバイスが聞ける。また、兄弟のいない子ども達も、自分より年齢が上の子や下の子との接し方を実践的に学ぶ機会となっている。

4. 母親にとっての子育てサークルの意味

ここでは、子育てサークルが保護者、特に子育て中の母親の生活にとっていかに必要とされる場であるのかを、Sサークルの立ち上げに携わったHさんの語りを参考に検討する。中村(2002)の報告によると、子育て中の母親の実に4人に1人がなんらかの子育てサークルに参加している。母親が参加する子育てサークルの運営内訳は、保健センターや児童館等の地域の子育て支援として公的に運営もしくは後援されているサークルがおよそ58%である。その一方で、およそ32%のサークルは母親が主体的に立ち上げ運営している子育てサークルだといわれている(中村 2002)。日々子育てに追われるなかで、少なくない数の母親が自らの力で子育てサークルを立ち上げ、自らの時間と労力を割いているのである。

子育てをしながらSサークルを立ち上げたHさんは、サークルを立ち上げる以前の自身の様子を以下のように語る。(括弧内は筆者による加筆、以下同様)

(出産後) 突如、母親1年生として、子育てという全く別世界に放り込まれました。毎朝、主人を見送ると、丸一日、赤ちゃんと一人で向き合うのです。この子の手が少し離れ、以前と同様に仕事に復帰できるのは、保育園入園の4年後かしら? いや、小学校に入る7年

後？この間にも職場の同僚たちは皆、業績を蓄積し、確固たる地位を築いていくのであろうという想いが頭の中をぐるぐると廻り、何だかとても長く長いトンネルに入ってしまったような、そんな孤独感が否応なく襲いました。（Hさん、2011年12月5日）

Hさんは、出産までのおよそ10年間、研究者としてある研究機関においてフルタイムで研究に従事していた。Hさんは研究に携わることで、高等教育機関における知識の蓄積だけでなく産業界にも実益をもたらす貢献をしてきた。そのため、仕事への責任感が強いだけでなく、日々の充実感や達成感の多くを仕事から得てきた。しかしながら、出産を機に仕事から離れたことで、自らのよりどころを失い焦燥感を抱いていたことが伺える。そして、Hさんは「長いトンネル」から脱するために子育てに関する情報収集を始める。そのときの様子を次のように語る。

毎日、赤ちゃんの授乳、おむつ換え、あやし、お風呂、寝かせつけといった、単純ながら、片時も目が離せない重労働の中、鬱々とする日もありました。ふと世の中の育児中のママ達はどうしているのだろう、皆同じ思いをしているのだろうか、それとももっと良いやり方があるのだろうか、と子育て関係のSNSを覗いたり、また育児書や育児雑誌を読みあさるようになりました。しかし、知れば知るほど焦りました。情報は集めれば集めるほどありましたが、そういった調べ物をしている時間、我が子とは実際には向き合っていないわけです。Webに夢中になっていると、あっという間に2時間が過ぎており、寝ていたはずの子が、いつから起きていたのか、ぱっちり目を開け、私の方を興味深げにじっと見つめていたこともありました。これでは本末転倒だ、事故でもあったら育児情報収集どころではないとさらなる焦りを感じ、そんな悪循環を抱えながら半年近く、出口の見えない日々を過ごしました（Hさん 2011年12月5日）。

Hさんは、自らの焦りを他の母親達が如何に子育て中の孤独感を乗り越えているのか、その方法論を知ることで解決しようとしたものの、その解決方法をパソコン上の情報や育児書・雑誌に頼ったことで皮肉にも新たな問題を抱えることになった。そして、そのような生活からの脱却の転機となった経験を次のように語る。

そんな日々少し光が差したのは、やはりWebサイトで見つけた親子英語サークルでした。日常とは違う英語という世界に触れられ、何と言っても“親子で”英語を一から楽しく学ぶことができる点が私にとって大きな魅力でした。また、自分は英語の苦手意識が強く、仕事でも大変苦勞してきたことから、我が子にはどうか楽しく、自然に英語を習得してほしいという想いが強くありましたので、月に数回の短い時間ではありましたが、実行に移すことでその焦りも大幅に軽減されました。またそれと同じくらい魅力的であったのは、英語を得意とする母親達が、自分のおんぶ紐で背負って、時には、レッスン中に授乳しながらも、

講師として活躍し、サークルを懸命に運営している姿でした。とても輝いて見えました。それまでの自分の育児に対するスタンスががらりと変わったような気がしました。以来、そのサークルがある日を指折り数え、それを励みに育児をがんばるようになりました。心の健康を取り戻した私を主人も共に喜んでくれました。（Hさん 2011年12月5日）。

こうしてHさんは、偶然見つけた子育てサークルに参加することで、これまでとは違った「育児に対するスタンス」（Hさん）を発見した。その発見は、既存のサークルに参加するだけではなく、自らが新たに子育てサークルを立ち上げるまでにいたった。その時の様子を以下のように語る。

時同じくして、偶然にも学生時代の友人達が育児に突入しました。それを期に、第一線からしばし離れて、手があいている同期達にも声をかけ、彼女達の専門とする分野でインストラクターになってもらったり、知り合いのネイティブインストラクターを紹介してもらい、Sサークルが誕生したのです。結果的に、親子でフランス語、英語、芸術が学べるという、身近にはあまり存在しない親子多言語・アートサークルSが誕生しました。（Hさん 2011年12月5日）

ここまでのHさんの語りから、Hさんが子育て初期に感じた焦燥感を子育てサークルを通して乗り越え、子育てとの新たな関わり方を見いだしたことがわかる。また、同じ興味関心をもつ母親たちを発見したことで、お互いの相互支援の場を自らの手で創り出してきたことが明らかとなった。すなわち、Hさんや子育てサークルを通して出会い、集まった母親たちにとってサークル活動は、まさに自らの手で創り出した「子育て支援」なのである。官主導の子育て支援が数多く策定されるなかで、子育てサークルの数が増加し続ける背景には、子育て中の保護者特に母親たちが、個人のネットワークを利用して自らが望む支援を作り出す必要性を感じているからであろう。子育て支援の受け手ではなくその担い手として活動する母親の姿は、公的援助が十分に届いていない子育て支援のニーズを映し出す鏡なのである。

5. Sサークルの保護者に対する働きかけ

これまでに検討してきたように、Sサークルは保護者を子育て支援の受益者としてだけでなくその担い手にする。すなわち、サークルを立ち上げたHさんも、もともとは他サークルの参加者、つまり受益者でしかなかった。しかし、自らも子育てサークルを立ち上げ、子育て支援のいわば担い手となったのである。また、Sサークルが2年半という月日を経て継続開催されていく中で、参加者の保護者の中から、自発的にサークル運営の裏方、通訳といった手伝いをする保護者らがでてきた。これらにみる子育て支援の担い手としての保護者の創出は、子育てサークルの特性の

1つであろう。そこで保護者がいかに子育ての相互支援の場である子育てサークルに主体的に関わっていくことができるのかを、Sサークルの試みを事例として具体的に検討したい。

まず1つ目に挙げられるのは、Sサークルにおいて保護者が講師としてサークル活動を支えているという点であろう。Sサークルで行われるフランス語、英語、そして芸術を教える講師の多くは自らも子育て中の母親たちである。実際に仕事として語学教育や芸術教育に携わっている母親や自らの海外経験や特技を生かして講師として活動に参加する母親たちもいる。また、教えるという役割以外にもサークル運営の裏方として、教材作成の補助、当日の会場設営、受付業務や片付けなど、毎回のサークル活動に必要なさまざまな業務に積極的に尽力する母親たちも多い。母親たちは、親子でサークル活動に参加する経験を通して、ただ活動の受益者という立場から活動を支える担い手へとSサークルへの関わり方を変容させていく。

また、2つ目の試みとしては、父親への働きかけである。多くの子育てサークルは平日の昼間に開催されているが、Sサークルはその活動の一部を週末に実施することで母親だけではなく父親のサークル参加を積極的に呼びかけている。2010年より国が取り組みを始めた「イクメンプロジェクト」を一例とする、父親の子育て参加は社会的な関心を集めている。実際に、未就学の子どもを育てる父親のおよそ7割以上は、子育てを楽しい時間と考えている（厚生労働省 2003）。しかしながら、父親が持つ子育てへの意識に関するMatsuyamaら（2009）の調査によると、父親は子育てへの積極的参加を望み、実際にそれに取組んでいるという意識を持つ一方で、子育てと仕事の両立が非常に困難であることや職場や周りの人々からは「育児に一生懸命な父親」という存在をなかなか理解してもらえないという子育てをめぐる葛藤を抱えている（厚生労働省2003, Morrone and Matsuyama 2009）。これまでにセカンドシフトやスーパーママという言葉で語られてきた子育てと仕事の両立で苦悩する女性たちの姿は大きな話題となり、その問題は既に顕在化している（Hochschild 1989, Self 2005）。しかしながら、現代においては父親もまた母親と同様の葛藤を抱えているのである。すなわち、「イクメン」が注目されればされる程、父親の子育て参加が推進され「子育てに参画しなくてはならない」という社会的圧力と、自らの子育て観、そして父親の子育て参加に関する理解が不十分な職場環境の狭間で父親たちもまた悩み苦しんでいるのだ。こうした状況を鑑み、Sサークルは父親たちの相互支援の場となるように、その活動を父親たちにも開放し彼らの積極的な参加を促している。



図2：サークルに参加する父親達の風景

6. まとめ

「ニーズを持ったとき、人はだれでも当事者になる」（中西・上野 2003）。まさしく子育て中の保護者のことであろう。すなわち、1人の保護者が子育てを通して感じる「ニーズ」が、その保護者を子育て支援の当事者にするのである。また、その活動の当事者になっていくことで自らが抱く「ニーズ」が、決して孤立したものではなく多くの保護者もともに感じていることを発見していく。そして、ニーズを持ち、支援の当事者となり仲間を発見していくというプロセスの中に身を置くことを保護者に許す場が、まさに子育てサークルなのである。情報爆発時代と呼ばれる今日、子育てに関する情報が、育児雑誌やテレビ番組、教育ビジネス業界のWebサイトなどから大量に発信されている。育児や教育に関する知識が即座に入手できることは、特に初めて子育てに取り組む保護者たちにとっては非常に有益といえる。しかしながら、あまりの情報の膨大さに、それらを客観的に精査し判断する余裕をもてない保護者も少なくない。また、そのような情報から示唆されるような理想の育児・教育環境のイメージに翻弄され、焦燥感に押しつぶされることもあろう。それ故、子育てサークルという手が届きやすい身近な子育て支援の場は、多くの保護者にとって現実的な支援資源なのである。

Sサークルは非常に若いサークルであるため調査データは、まだ十分とは言えない。本稿では、サークル活動の概要報告にとどまったが、今後はより多くの保護者への聞き取り調査や活動の観察を重ねていきたい。多くのサークルが長期的な活動を断念していく中で、Sサークルの活動が保護者にとっての「支援の場」として、少しでも長く活動を継続していくことが期待される。

【謝辞】

本稿を執筆するにあたり観察および調査に協力していただいた、Sサークルの運営者Hさんおよび他のスタッフの皆様にご感謝を述べたい。また、本稿への写真資料の掲載を許可して下さったサークル関係者の方々に重ねて御礼を述べたい。

【文献】

原田正文, 福井聖子, 服部祥子, 2002, 「現代日本における子育て支援方策に関する研究（第一報） - 関西地域における『子育てサークル』に関する統計的調査」『大阪人間科学大学紀要』1, pp69-74.

Hochschild, Arlie R. 1989, *The Second Shift*. New York. Penguin Books.

厚生労働省, 2003, 『子育て支援策等に関する調査研究』. 厚生労働省.

Morrone, Michelle H. and Matsuyama, Yumi. 2009, "Japan's Parental Leave Policy: Has it Affected Gender Ideology and Child care Norms in Japan". *Childhood Education* vol.86,no6, pp-371-375.

内閣府, 2009, 『平成19年版 少子化社会白書』内閣府.

子育てサークルという「支援」の場

中西正司, 上野千鶴子, 2003, 『当事者主権』, 岩波書店.

中村敬, 2002, 「地域における子育てネットワーク構築に関する研究」『平成13年度厚生科学研究報告書』.

Self, Sharmistha. 2005. "What Makes Motherhood so Expensive? The Role of Social Expectations, Interdependence and Coordination Failure in Explaining Lower wages of Mothers" *The Journal of Socio-Economics*. vol.34.pp850-865.

品川ひろみ, 2005, 「成員からみた子育てサークルの解散」『子ども社会研究』11号, pp.45-60.

汐見稔幸, 2001, 「少子化社会の子育てのゆくえ—広がる子育てサークル—」『国立女性教育会館研究紀要』5, pp129-138.

寺田恭子, 2005, 「子育て支援から子育てコミュニティ創生に向けての課題—子育てサークル調査をふまえて—」, 『子ども社会研究』11, pp 61-74.

松山 有美 (名古屋経営短期大学子ども学科 講師)

遠山 仁美 (名古屋産業科学研究所 研究員)